
 紹介

圖 書

● 日本書紀私鈔

聖 岡 著

國に於ける外交關係を殊に重要視せる外、大體に於て變つた見解はない。明治時代に於て産業振興の爲め國家が中心となつて努力したことに注意し、それには一つには當時國家のみが資本あり信用ある唯一の組織であつたこと、二つには前代に於て國家は國民活動を指導する上に絶對的地位を有して居たこと、の二つの理由に依ると言つて居る(160)。

本書は平明簡潔なる叙述をなしたものであつて(紙數二二四頁)日本に關する理會に努めてゐる。極東に於ける日本の地位に關する所見の如き吾等の有する所と變りはない。本書の目的が一つには日米の親交の爲に存し、米國に於ける日本協會(Japan Society)の援助の下に出でたことも注意すべきである。(大正一〇、九、一)

本書は常陸爪連常福寺の什物にして了譽上人の著と稱せらる、日本書紀私鈔を星野日子四郎武田祐吉二氏の嚴密なる校訂を経て覆刻したるもの附するに高瀬承嚴氏の「日本書紀私鈔解題」及び「著者聖岡の事蹟及び思想」の二篇を以つてせり書紀私鈔は元と三卷、神代より神武天皇紀までの註釋を載せ第三卷の終に「人王百代具名記」を添へて神武天皇より後圓融院天皇までの歴代の御諱及び諡號を列記し別に吉野帝として「第九十六儀良、第九十七熙成、第九十八増長慶壽院法皇」を挙げたり歴代の御諱等に多少の誤謬あり吉野朝には長慶天皇と後龜山天皇との御登祚順位を顛倒したれども而も増長慶壽院法皇を挙げたるは天皇御即位の考證に一の史料を加へたるものとして珍とするに足る本文の註釋は字句の解釋に止りその基礎

こする所の思想は當時通行の神道説にして他奇なし。雖も書紀の末疏にして當時の撰になれるもの前に釋日本紀神代口決あり稍後れて日本紀纂疏あるのみなれば稀觀の書たるを失はず殊に淨土門流に此の著あるは頗る注目に値す本書を以つて聖間の著とするは第三卷の奥書に「了譽三卷私鈔」云々の語あるの外直接の證據なし。雖も聖間に別に古今集序註の著ありて國典に造詣深きを示し又麗氣記抄、破邪顯正義を著はして神道を説けるものあり。こいへば必ずしも疑ふべきにあらずたゞ専修念佛の教義が斯の如き雜修を如何に會通せん。こしたりしかは極めて興味ある問題なるべし高瀬氏の解題及び傳記はよく委曲を盡せるを多し。こ共に此の點に就いて詳細なる解説を缺きしを遺憾。こす（明治聖德紀念學會發行、價三、五〇）

● 上代國文學の研究

武田 祐吉著

著者は多年東京帝國大學に於いて萬葉集の校勘に従事し傍ら専ら假名文字發達以前の國文學の研究に没頭せる人にして本書は即ち其の平素の蘊蓄を披瀝せるものなり

編を第一上代の文化。こ説話文學第二歌謠。こ漢文學第三資料の解説第四萬葉集の撰定に關する研究の四に分ち第一編には主として文學上より上代の文化を論じ第二編には紀記の歌謠及び其形式を説き萬葉歌人を品陞し又漢詩文及び小説を述べ第三編には上代の文學書の詳細なる解説を興へたり而して第四編は即ち萬葉集の本典研究にして著書自ら序文に「第四編に極なき愛者の念を覺える」こいへるが加く最も其の力を致せし所にして従つて又最も多く傾聽すべき研究に當り就中萬葉集撰者の問題については近時殆ど定説の如くなれる大伴家持説を貶け眞淵。こ同じく集中に新古の兩部分あるべきを説き又東歌が東方の國風にあらざるを論じたるが如き特に衆目を引くに足るものなり卷頭の上代文化を論じたる編の加きも亦吾人をして多大の興趣を覺えしむるもの。尠からず津田氏和辻氏等の研究を併せて今や古代の文學研究に新しき機運の動きつゝあるを感じ得て愉快禁じ能はざるものあり（博文館發行、價二、三〇）〔以上岩橋〕

● 日本經濟史原論

本庄榮治郎著